京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-13

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇－一三　史跡賀茂別雷神社境内

史跡賀茂別雷神社境内

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂別雷神社境内

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、防火施設整備（建造物）事業に伴う史跡賀茂別雷神社境内の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

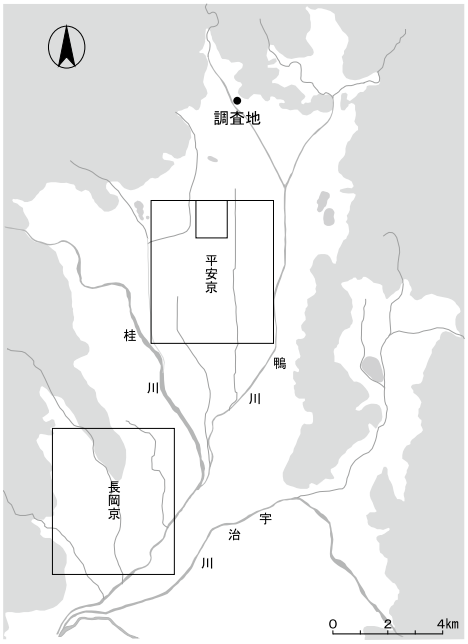
令和３年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	史跡賀茂別雷神社境内
2	調査所在地	京都市北区上賀茂本山339
3	委　託　者	宗教法人　賀茂別雷神社　代表　宮司　田中安比呂
4	調 査 期 間	2020年８月３日～2020年８月17日
5	調 査 面 積	21㎡
6	調査担当者	布川豊治
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「西賀茂」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	本 書 作 成	布川豊治 付章：家原圭太（京都市文化財保護課）
13	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過　…… 1
２．位置と環境　…… 4
（１）位置と環境　…… 4
（２）周辺の調査　…… 4
３．遺　　構　…… 7
（１）基本層序　…… 7
（２）遺　構　…… 7
４．遺　　物　…… 11
５．ま と め　…… 12
付章　試掘調査　…… 13

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査区全景（南東から）
２　西トレンチ全景（南から）
図版２　遺構　１　橋殿と幾重にも堆積する整地層（南西から）
２　西トレンチ西端断割り断面（南西から）
３　二ノ鳥居から橋殿を見る（南西から）

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図及び二ノ鳥居から橋殿への参拝路断面図（１：250）　……　2
図３　調査前全景（西から）　……　3
図４　調査区設定（西から）　……　3
図５　調査状況（南から）　……　3
図６　断面剥ぎ取り作業（南東から）　……　3
図７　遺跡と周辺調査位置図（１：5,000）　……　5
図８　西トレンチ実測図（１：50）　……　8
図９　東トレンチ実測図（１：50）　……　9
図10　試掘調査区配置図（１：2,000）　……　14
図11　試掘１区配置図（１：500)、断面図（１：80）　……　15
図12　試掘２区配置図（１：500)、断面図（１：100）　……　17
図13　試掘３区配置図（１：500)、断面図（１：50）　……　18

表　目　次

表１　遺構概要表　……　7
表２　遺物概要表　……　11

付　図　目　次

付図１　自動火災報知設備工事計画図　……　19
付図２　消火設備工事計画配管図　……　20

史跡賀茂別雷神社境内

１．調査経過

今回の調査は「国宝賀茂別雷神社本殿ほか35棟　防火施設整備（建造物）事業」に伴うものである。賀茂別雷神社（以下「上賀茂神社」という）から委託された調査を京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という）及び京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という）の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。また、同じ事業下で、市文化財保護課により試掘調査が並行して実施された（付章参照）。

調査地は史跡賀茂別雷神社境内の二ノ鳥居から橋殿に至る広場に位置する。調査区は市文化財保護課の指導に基づき、細殿の東側・土屋前に幅約１ｍ・長さ21ｍの方形を設定した。調査区内には祭礼用仮設建物の目印石があり、この部分を残したため、西トレンチ約８ｍと東トレンチ約12ｍとなった。

調査は2020年８月３日から開始した。まず表面の細かい砂利の化粧土を除去し、その下は重機掘削により遺構面と考える面まで約0.4ｍ掘り下げ、そののち手作業により調査を開始した。調査中は、府・市両文化財保護課の臨検を受け、指導を受けた。調査は８月17日に器材搬出、上賀茂神

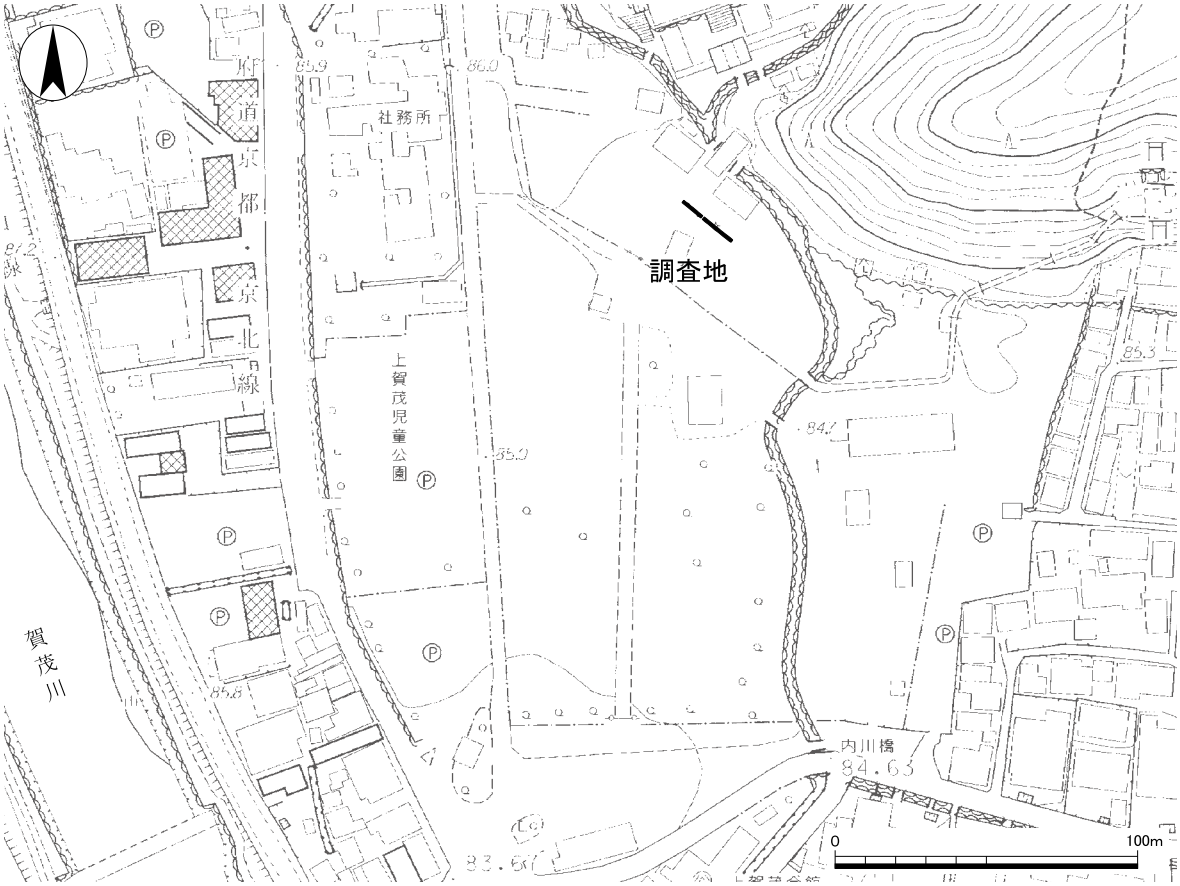


図１　調査位置図（１：2,500）

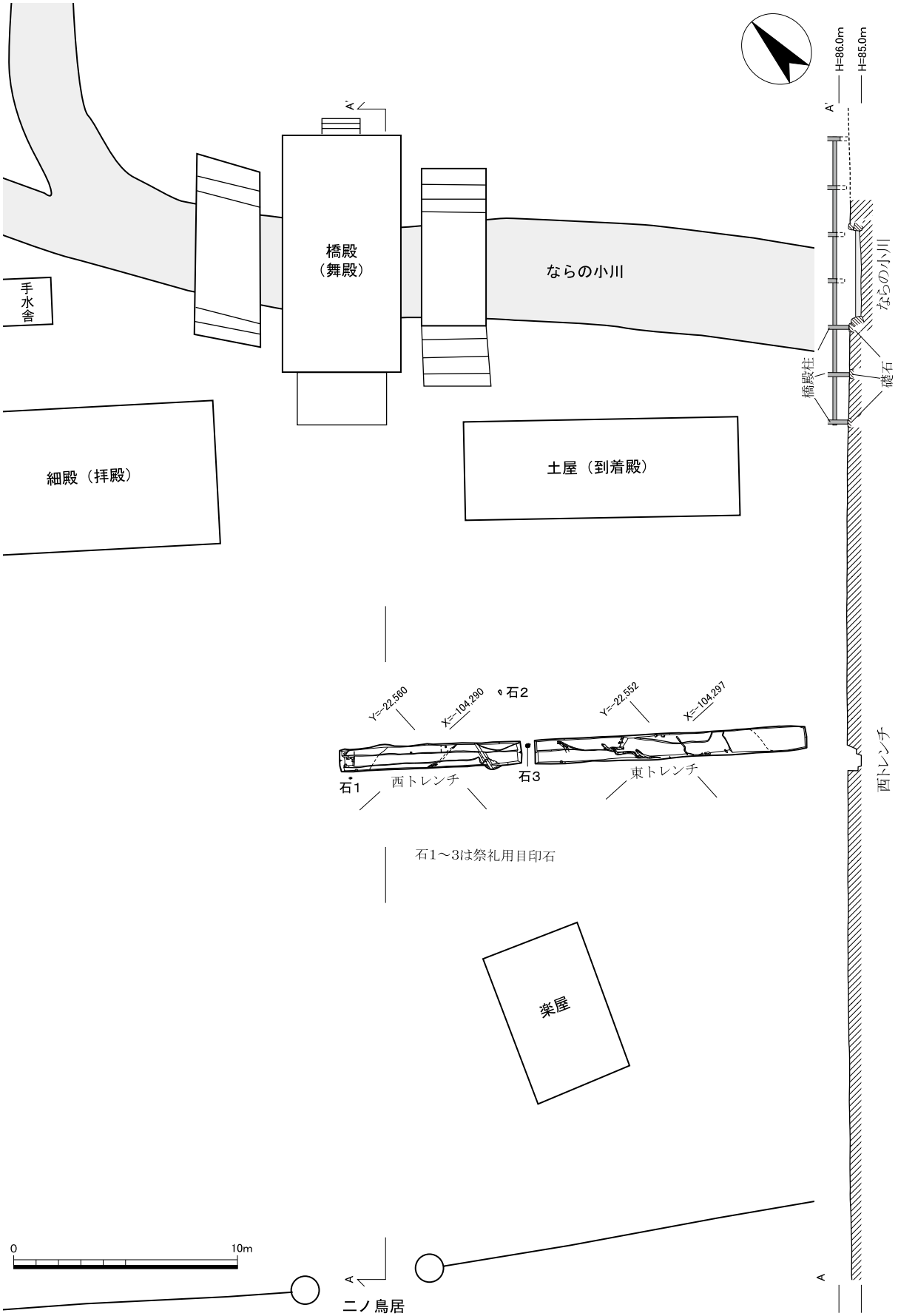


図２　調査区配置図及び二ノ鳥居から橋殿への参拝路断面図（１：250）

図３　調査前全景（西から）

図４　調査区設定（西から）

図５　調査状況（南から）

図６　断面剥ぎ取り作業（南東から）

社への調査成果説明、８月18日に整地層の堆積状況が明瞭な西トレンチ北壁面の一部を記録として剥ぎ取り、調査を終了した。その後、防火施設工事の埋戻し作業終了を待ち、８月26日に残存する養生シート・土嚢袋などの器材を撤収した。

調査の結果、調査区西トレンチの西側は、砂を主体とする厚さ５㎝前後の層が幾重にも重なり、参道の中世から現代まで至る変遷を明らかにできた。

２．位置と環境

（１）位置と環境

上賀茂神社は、京都盆地の北部、下鴨神社のある高野川・賀茂川合流部より賀茂川を約４km遡った東岸に社殿があり、境内地は社殿の北約２kmに位置する神山（こうやま）などの飛び地を含む広い範囲に及ぶ。調査地は社殿の南側に位置する。

社殿の北には縄文時代の集落跡と推定される上賀茂遺跡、東の本山には旧石器時代の上賀茂本山遺跡・ケシ山遺跡、古墳時代の本山古墳群・ケシ山古墳群がある。調査地の南東、賀茂川の東岸には弥生時代から古墳時代・平安時代の植物園北遺跡が広がっている。上賀茂神社に関連する遺跡としては斎宮の神館跡、神宮寺跡などがある。

上賀茂神社の祭神、賀茂別雷命については、『山城国風土記』逸文に加茂説話・加茂伝説として「カモとは賀茂建角身命であり、遍歴の末、賀茂川の地にとどまった。その娘、玉依姫命が身ごもり産んだ子が成人し、天に昇った。その時、祖父の賀茂建角身命が名を賀茂別雷命と号した。」と記されている。社史では上賀茂神社は本殿の北に位置する神山に降臨・鎮座し神社が始まったとされている。社については、天平の頃に賀茂別雷神社から賀茂御祖神社（以下「下鴨神社」という。祭神は賀茂別雷命の母である玉依姫命と祖父の賀茂建角身命。）と別れたとされる。両上賀茂神社・下鴨神社の例祭である賀茂祭は葵祭ともいい、京都三大祭の一つとしても知られる。

上賀茂神社に関わる最も古い記録は、「賀茂祭」に関する記述として『続日本紀』「文武天皇二年（698）三月二十一日条」がある。古代に長岡京および平安京遷都に伴い、山城国の地方社であったものが国家中央の社へ格が上がる。朝廷の尊崇を受け、伊勢神宮に準じた扱いとなり、しばしば天皇行幸があり、内親王が斎王を務めるようにまでなる。鎌倉時代初めに源頼朝に諸国の荘園を安堵される。社殿は長元九年（1036）後一条天皇の時代に式年遷宮が始まり、以後文久三年（1863）までの約830年間に27回の記録が確認でき、現在まで42回式年遷宮がなされたとされる。社殿焼失の主なものは文明八年（1476）、氏人と社司が争った神社内紛によるものであり、多数の死者及び発生と共に神殿などが焼失する。現在の本殿・権殿などは文久三年（1863）に造り替えられたもので、昭和四年（1929）国宝に指定された。その他に41棟が重要文化財に指定されている。神山を含む広い上賀茂神社境内は1993年に史跡指定、翌1994年に世界遺産に登録された。

（２）周辺の調査

上賀茂神社境内での調査は数少ない。1989年の調査[1)]では、社務所南側駐車場において試掘調査が実施されている。地表下1.2ｍ前後で中世の遺物包含層を、その下層は賀茂川の氾濫と考えられる砂礫層を確認した。遺構は検出されなかった。

2011年調査[2)]は、境内参集殿西側の収蔵庫新設工事に伴う発掘調査である。ここでは鎌倉時代と室町時代の整地層を検出した。

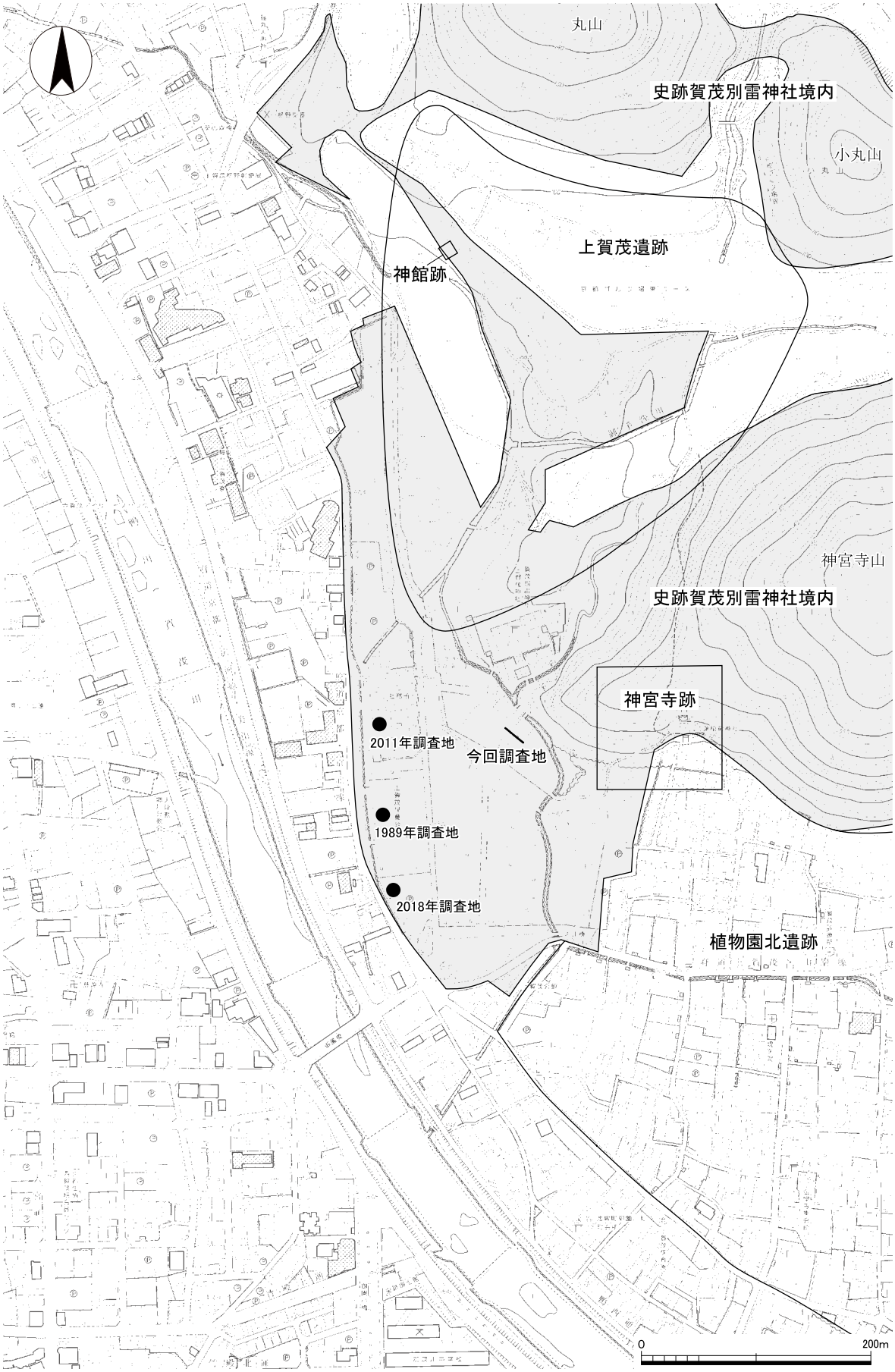


図７　遺跡と周辺調査位置図（１：5,000）

2018年調査は、御園橋改築事業に伴う考古学的調査である。境内の南西端付近に府道に面して位置する土塁を調査した。調査の結果、現在の土塁基底部は江戸時代後期の石築地であり、上部は近現代に改修されていることが判明した。

註

１）　概要が以下に掲載されている。
「付章　1989年試掘調査」『史跡賀茂別雷神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

２）　近藤章子『史跡賀茂別雷神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011－1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年

参考文献

京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市遺跡地図台帳』　京都市文化市民局　1996年
林屋辰三郎他編「上賀茂神社」『京都市の地名』　平凡社　1987年
京都市編『史料　京都の歴史　第６巻　北区』　平凡社　1993年
山路興造　第三部第二章「集落と神社」『平安京提要』　角川書店　1994年

３．遺　　構

（１）基本層序

調査地はほぼ平坦であるが、わずかに北西から南東に低くなっており、調査区西端（西トレンチＢ地点）の標高が約85.7ｍ、調査区東端（東トレンチＣ’地点）の標高が約85.4ｍである。

基本層序は、最上層のビリ砂利の表層を含む現代の化粧土が厚さ0.05～0.1ｍ堆積しており、その下は地山に至るまでに、近・現代から鎌倉時代に遡る整地層が大きく４層（整地層１～４）堆積している。

西トレンチでは、地表から深さ約0.8ｍで地山である砂礫層を確認し、その上層で顕著な砂や砂泥の整地層を検出した。これらの整地層は大きく４層（整地層１～４）に分けることができる。最下の整地層４は調査区西端の断割り部分で確認した。

東トレンチでは、地表から深さ約0.6～0.7ｍで地山である砂礫層を確認し、その上層で砂や砂泥の整地層を検出した。整地層は西トレンチから続く３層（整地層１～３）である。地山は中央付近から東に向かって高くなり、東端では地表から約0.35ｍ下で砂礫層を確認している。

（２）遺　構

調査区は既述したように西トレンチと東トレンチに分かれる。調査区のほぼ中央部分には、避雷導線を埋設した攪乱坑がある。

今回の調査では顕著な遺構は確認できなかったが、トレンチ断面や攪乱断面の精査によって整地層１～４を検出した。平面的な調査は整地層３上面で行い、西トレンチでは地表下約0.4ｍ、東トレンチでは地表下約0.3～0.4ｍである。整地層については下層から上層へ順に述べる。

なお、「賀茂別雷神社境内絵図[1)]」には、今回の調査区あたりに松と考えられる樹木が描かれている。これに注目して、検出した全ての樹木の根の樹種同定を実施した。しかしながら大半がスギ、一部が広葉樹であり、全てが「マツ」ではないと判明した。

整地層４　整地層３の下層にあたる整地層である。地山の砂礫層直上の整地土で、厚さは調査区西端で約0.15ｍ、東へ向かって徐々に薄くなり、西端から4.7ｍ付近で地山の砂礫層に取付いて途切れると考えられる。上面は平滑で、細かい砂が敷かれる。一時期の境内の地表面であったとみられる。後述する整地層３との関係から鎌倉時代のものである可能性が高い。

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
鎌倉時代 ～室町時代	整地層３・４	
江戸時代	整地層２	版築状の砂層と砂泥層の互層

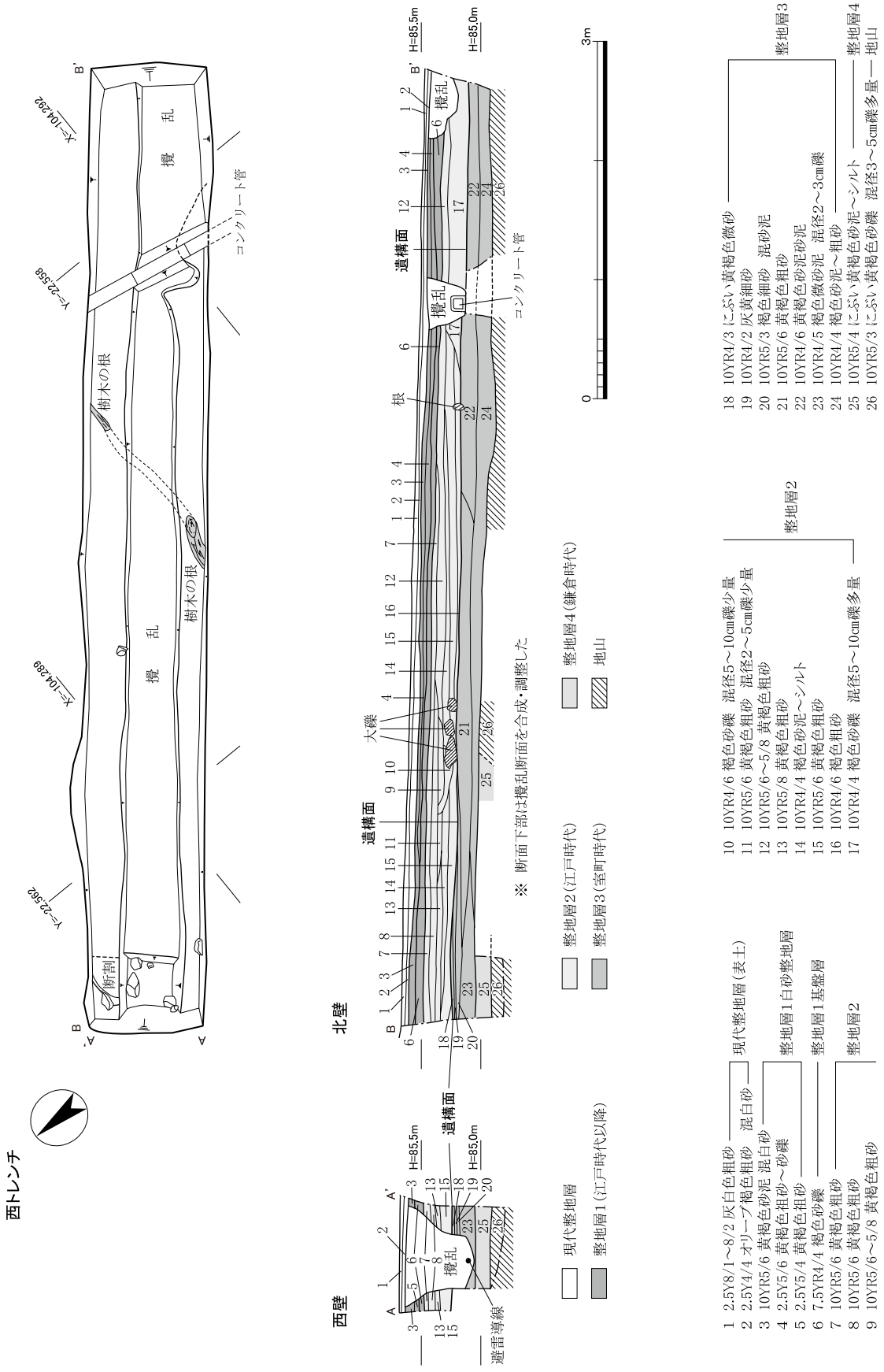


図８　西トレンチ実測図（１：50）

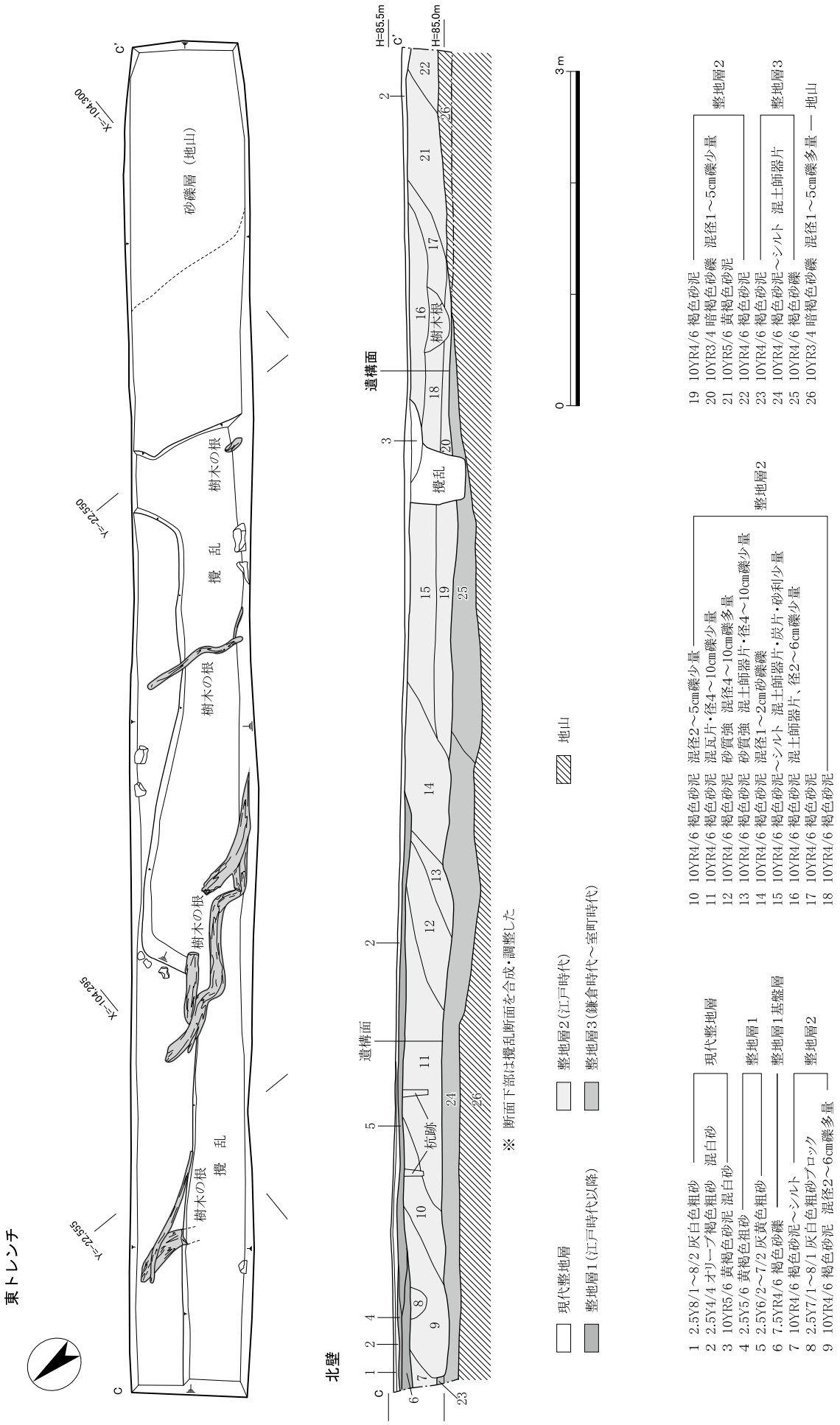


図9　東トレンチ実測図（1：50）

整地層３　平面的な調査を行った遺構面の基盤となる整地層である。厚さ0.2～0.3ｍの砂泥から砂礫層からなり、西トレンチでは大きく２層に分かれる。東では徐々に薄くなり、調査区東端から西へ約2.5ｍ付近で途切れる。上面に砂の分布する調査区西端では、薄い砂層が少なくとも３層（図８－18～20層）認められる。この砂層は境内の化粧土とみられ、化粧土による整地が繰り返し行われていたことを示している。この整地層からは室町時代の遺物が出土しており、整地層３の上面は室町時代の境内の地表とみられる。

遺構面（整地層３上面）は、わずかに西から東へ下降している。調査区西端では標高約85.25ｍ、調査区東端から西へ約2.5ｍ付近で地山の砂礫層となり、その標高約85.0ｍである。遺構面に際立つ遺構は検出できなかったが、調査区西端から東へ約２ｍまでは、上面に細かい砂が分布している。なお、この遺構面で樹木の根が多く出土した。

整地層２　整地層３の上層にあたる整地層である。厚さは0.05～0.4ｍ、今回検出した整地層では一番厚い。調査区の西側と東側で堆積状況が大きく異なる。東側は一定の単位で斜めに堆積している。一方、西側は厚さ数センチの薄い層が何層も水平に堆積した砂主体となる。両者の境界は西トレンチの調査区西端から南東へ約5.8ｍ付近である。これらの堆積状況から整地層２の東側は東から土をいれて一時期に造成したものとみられる。整地層２の西側は薄い砂質土とシルトが交互に堆積する。このことは、一定期間毎に整地して白砂を撒き、化粧する工程を幾度となく行ったことを示してる。また、調査区西端から南東へ約2.5ｍ付近には拳大よりやや大きい礫が数個まとまって置かれる。ここを境に西側整地層はより薄く細かい堆積となる。このことは、この石群は造成時の作業変化点の目印と考えられる。この整地層２からは江戸時代の瓦小片が出土していることから、江戸時代に造成したものと考えられる。

整地層１　最上層の整地層である。調査区西端で厚さが約0.2ｍである。整地層の最下部は厚さ0.1ｍ前後の赤味を帯びた褐色砂礫層であり、この層は東トレンチ西側約1.2ｍ付近で途切れる。この褐色礫層を基盤として西トレンチでは砂の層が最大４層堆積する。これら砂層は調査区の西側では厚さが0.1ｍ前後あるが、褐色砂礫層が途切れるあたりから東側は徐々に薄くなり、調査区東端では１層、厚さが約0.05ｍとなる。この砂層は白砂と呼ばれる境内の化粧土である。整地層１は近現代のものであり、基盤の褐色砂礫層は整地層２との関係から江戸時代以降のものと考えられる。

註

１）　賀茂別雷神社史料編纂会「賀茂別雷神社境内絵図（部分図④）」『賀茂別雷神社史料　絵図』 賀茂別雷神社（上賀茂神社） 2018年

４．遺　　物

遺物は整理箱で１箱出土した。出土遺物の大半は攪乱からの出土である。また、その他の遺物は整地層から出土したものである。

出土した遺物は、土師器小片と瓦小片がある。小片のため図示することはできなかった。

遺物を時期別にみると[1)]、鎌倉時代から室町時代と考えられる土師器が11点、瓦が５点である。江戸時代と考えられる遺物は瓦が25点である。

註

１）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク掲載遺物点数	Ａランク未掲載箱数	B･C ランク箱数
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦				
江戸時代	瓦				
合　計		１箱	０点（０箱）	１箱	０箱

５．まとめ

今回の調査では、４時期の整地層を確認した。各整地層の時期は明確ではないが、整地層１が近現代から江戸時代、整地層２が江戸時代、整地層３が室町時代、整地層４が鎌倉時代とみられる。各整地層の上面は平坦であり、薄い砂層が広がる。この砂層はいわゆる白砂であり、上面は白砂による化粧が施されていたと考えられる。この化粧土は調査区の西端付近に集中している。調査区の西端は賀茂祭（葵祭）において勅使が一ノ鳥居から二ノ鳥居を通り、「社頭の儀」を行う橋殿へ至る通路上にあたり、それと関連する可能性が高い。なお、調査区西端から南東へ約2.5ｍ付近の整地層２最下部に置かれた造成の目印と考えた石群は、橋殿の東端を延長した位置にある。おそらく、この位置に合わせて通路に計画的に化粧が施されたのであろう。整地層３は室町時代の土器が出土しており、この頃から橋殿に通じる道路として整備されていた可能性がある。

今回検出したもので最も古いものは、鎌倉時代の整地層と考えられる。以降、現代まで長きにわたり、この一帯は境内地として維持されてきたと考えられる。鎌倉時代以前の遺構や整地層は確認できなったが、この点については今後の調査を待ちたい。

今回の調査は短期間・小規模なものであったが、境内地の整地状況を明らかにできたことは上賀茂神社の歴史を語る上で重要な調査成果である。

付章　試掘調査

京都市文化財保護課　家原圭太

（１）調査経過

防災設備工事のうち新規掘削の生じる３箇所（試掘１区～３区）において試掘調査を実施した(図10)。調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が行った。

試掘１区の調査（図11）

調査は2020年８月26日に行った。

調査区は、2020年８月に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下「埋文研」）が発掘調査を行った場所（本書第１章～第５章）の北西延長部分で幅約１ｍ、長さ約17ｍの約17㎡である。

基本層序は、現代整地層、近現代整地層、江戸時代整地層、室町時代整地層、鎌倉時代整地層、褐色砂礫の地山である。

検出した遺構は中世から近世の整地層と土坑１基である。本章では試掘調査で検出した整地層について、埋文研の発掘調査成果と統一した遺構番号で報告する。

整地層４　地山直上の整地層である。0.1～0.2ｍの厚さがあり、調査区東端から約３ｍで地山にすりつき以西では確認できない。上面は平滑で細かい砂が敷かれることから、一時期の地表面だったとみられる。鎌倉時代の可能性が高い。

整地層３　整地層４の上層にある室町時代の整地層である。0.1～0.3ｍの厚さがあり、東が薄く西は厚い。調査区東端から約９ｍで地山にすりつき以西では確認できない。上面はわずかに西から東へ下降する。整地層３と４の間には部分的に黒褐色砂礫の間層がみられる。室町時代の土師器皿小片が出土した。

整地層２　整地層３の上層にある江戸時代の整地層である。0.2～0.3ｍの厚さがあり、調査区の東側と西側で堆積状況が大きく異なる。西側は単層で水平に堆積することから、一時期に造成したとみられる。一方、東側は厚さ数センチの砂質土とシルトの互層となっており、水平に堆積する。一定期間ごとに整地して白砂を撒き、化粧する工程を何度か繰り返したことを示す。両者の境界は調査区東端から３ｍ西側にあり、そこに10～20㎝の石がまとまって置かれる。石が造成時の作業変化点の目印と考えられる。

整地層１　整地層２の上層にある近現代の整地層で、約0.1ｍの厚さがある。調査区東端から西約8.5ｍで整地層２にすりつき、以西ではみられない。赤味を帯びた褐色砂礫層であり、近現代の白砂化粧土の基盤を成す。調査区東端から西約４ｍで整地層１上面から打ち込まれた杭の痕跡を検出した。

土坑１　調査区西端で検出した幅1.5ｍ、深さ0.2ｍの土坑である。整地層２の下層、地山直上で検出した。出土遺物は小片であることなどから時期は不明である。

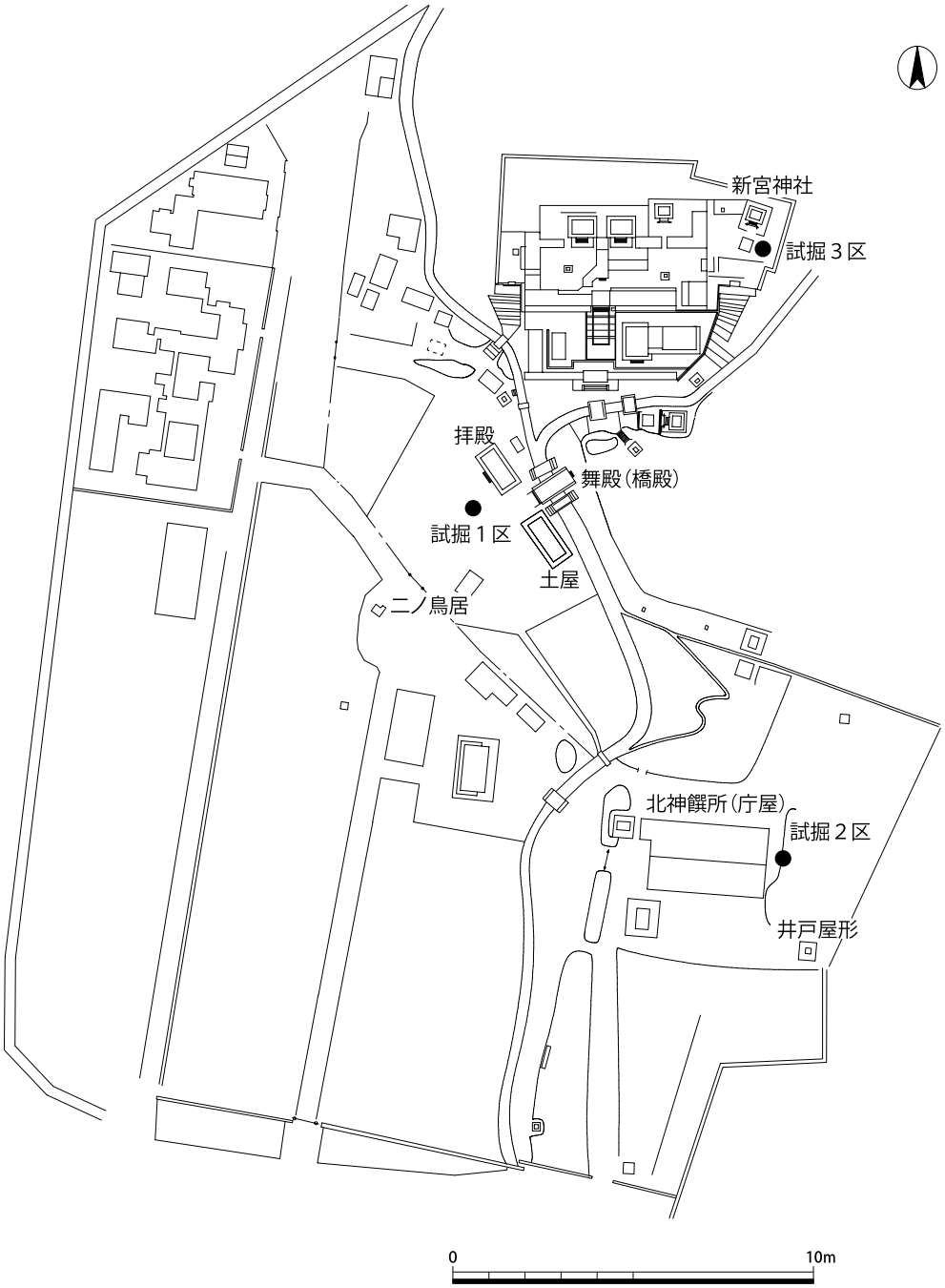
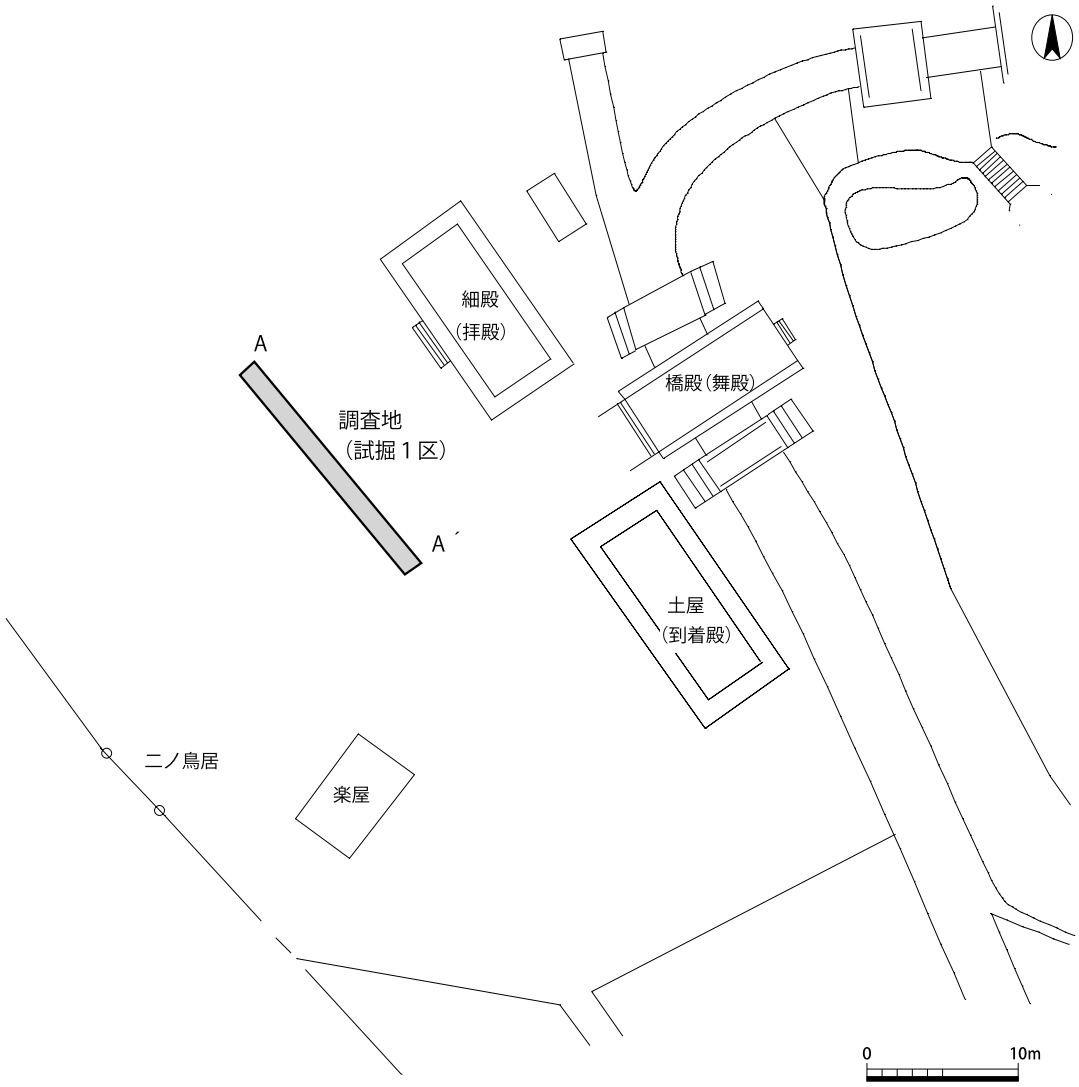
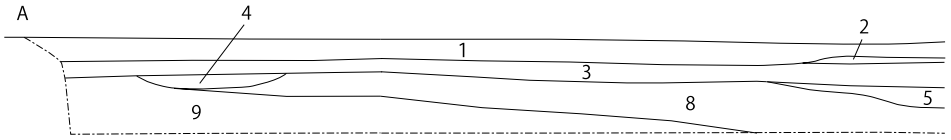
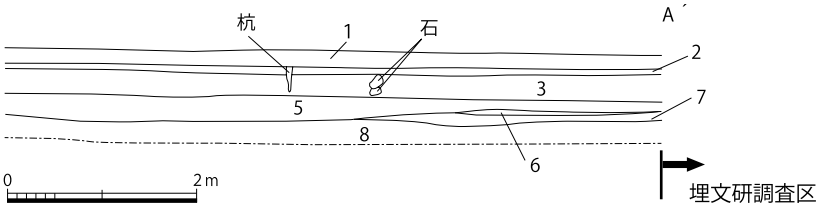


図10　試掘調査区配置図（１：2,000）

調査の結果、二ノ鳥居から橋殿への通路の変遷と構造が明らかになった。江戸時代の整地は大規模に行われており、埋文研の調査成果とあわせると、整地作業目印の石の間が約６ｍであり、この間を通路として丁寧に施工がなされていた。この幅は、二ノ鳥居や橋殿の妻の長さに近い。鎌倉時代や室町時代の整地層についても、調査区の西端へはつづかない。埋文研の調査でも調査区東端へは中世の整地層はつづかないことから、二ノ鳥居から橋殿への軸線が中世以降重視されていたと考えられる。







1　2.5Y8/1 ～ 8/2 灰白色粗砂　現代整地層（表土）
2　7.5YR4/4 褐色砂礫
3　10YR5/6 ～ 5/8 黄褐色粗砂（整地層２）
4　7.5YR4/4 褐色泥砂
5　10YR4/4 褐色砂泥～粗砂（整地層３）
6　10YR3/1 黒褐色砂礫
7　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥～シルト（整地層４）
8　10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫（地山）
9　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（地山）

図11　試掘１区配置図（１：500）、断面図（１：80）

試掘２区の調査（図12）

2020年11月19日に調査を行った。

調査区は重要文化財建造物北神饌所（庁屋）の東側で幅約0.7ｍ、長さ約34ｍの約24㎡である。鎌倉時代中後期の境内を描いたとされる「賀茂別雷神社境内絵図」によれば、庁屋とその周辺の施設群を囲う塀が描かれており、今回の調査で関連遺構の検出が予想された。

現地は南北方向の高まりが遺存しており、この高まりが近世以前まで遡る可能性や絵図にみられる塀との関係を明らかにすることが調査の課題となった。

基本層序は、現代盛土直下（GL－0.7ｍ）で近代の整地層を検出した。この近代整地層は２層に細分される。上層は浅黄色砂泥で近代の表土、下層は黒褐色泥砂で近世と中世の土師器小片を含む。近代の整地層は調査区の北端でのみ確認し、低いところを平坦に均すためのものと考えられる。近代整地層の下層で近世の整地層であるオリーブ褐色泥砂（GL－0.8ｍ）を検出した。調査区の南半では近代の整地層がないため、現代盛土直下（GL－0.4ｍ）で近世の整地層を検出した。近世整地層の下層で褐灰色砂礫の地山を検出した。

遺存している高まり部分については、深さ約0.8ｍまで現代盛土で、顕著な遺構や土層は検出されず、地山上面に約10㎝の近世整地層が堆積していることを確認した。

「賀茂別雷神社境内絵図」（鎌倉時代中後期）では、奈良社、庁屋、井戸、倉を囲うように塀がみられるが、今回の調査ではその痕跡はなく、さらに東方に想定される。また、江戸時代以降の絵図には塀などの囲繞施設はみられず、庁屋と井戸の間を小川（奈良の小川の支流）が南北に流れる。

現在、庁屋と井戸の間には小川は流れておらず、近代になって埋められたと考えられるが、今回の調査で小川の痕跡は見つからなかったことから、調査区のさらに東側に想定される。また、現在遺存している庁屋東の高まりは、絵図にはみられないことから、近代に樹木植栽のため土盛りされた可能性が高い。近代になって小川の埋め立てと周辺部の整地・植樹等手が加えられたと考えられる。

試掘３区の調査（図13）

2021年３月11日に調査を行った。

調査区は新宮社の東側で北東から南西へ幅約0.5ｍ、長さ約７ｍと、そこからＴ字状に南東へ幅約0.5ｍ、長さ約４ｍを設定した。調査面積は約5.5㎡である。絵図によれば、中世以来藤尾社が位置することから、関連遺構の検出が予想された。

基本層序は、現代白砂層、近代整地層、近世整地層、中世整地層である。各所で樹木の根による撹乱がみられたが、中世整地層上面で室町時代の土師器小片を多く含む土坑１基を検出した。

藤尾社に関わる遺構は検出されなかったが、近世以前の遺構面が良好に残存していることが明らかになった。また、近代整地層上面から直径約40㎝の石が１石出土した。平坦面を上にしているわけでなく、据付穴もみられないことから礎石の可能性は低いと考えられ、詳細は不明である。藤尾社は簡易な社であったことから礎石も置き型で遺構として残っていないものと考えられる。

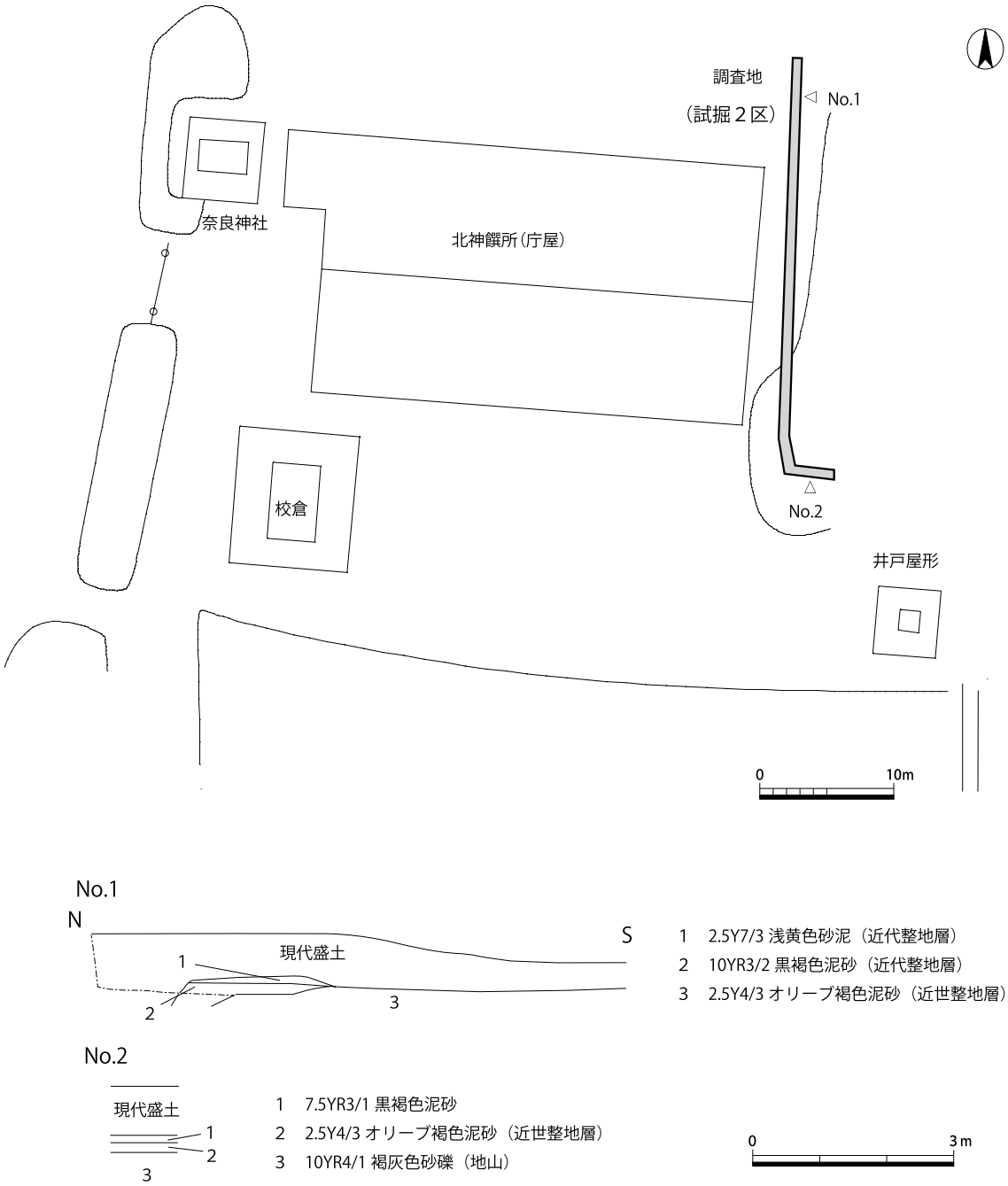


図12　試掘２区配置図（１：500）、断面図（１：100）

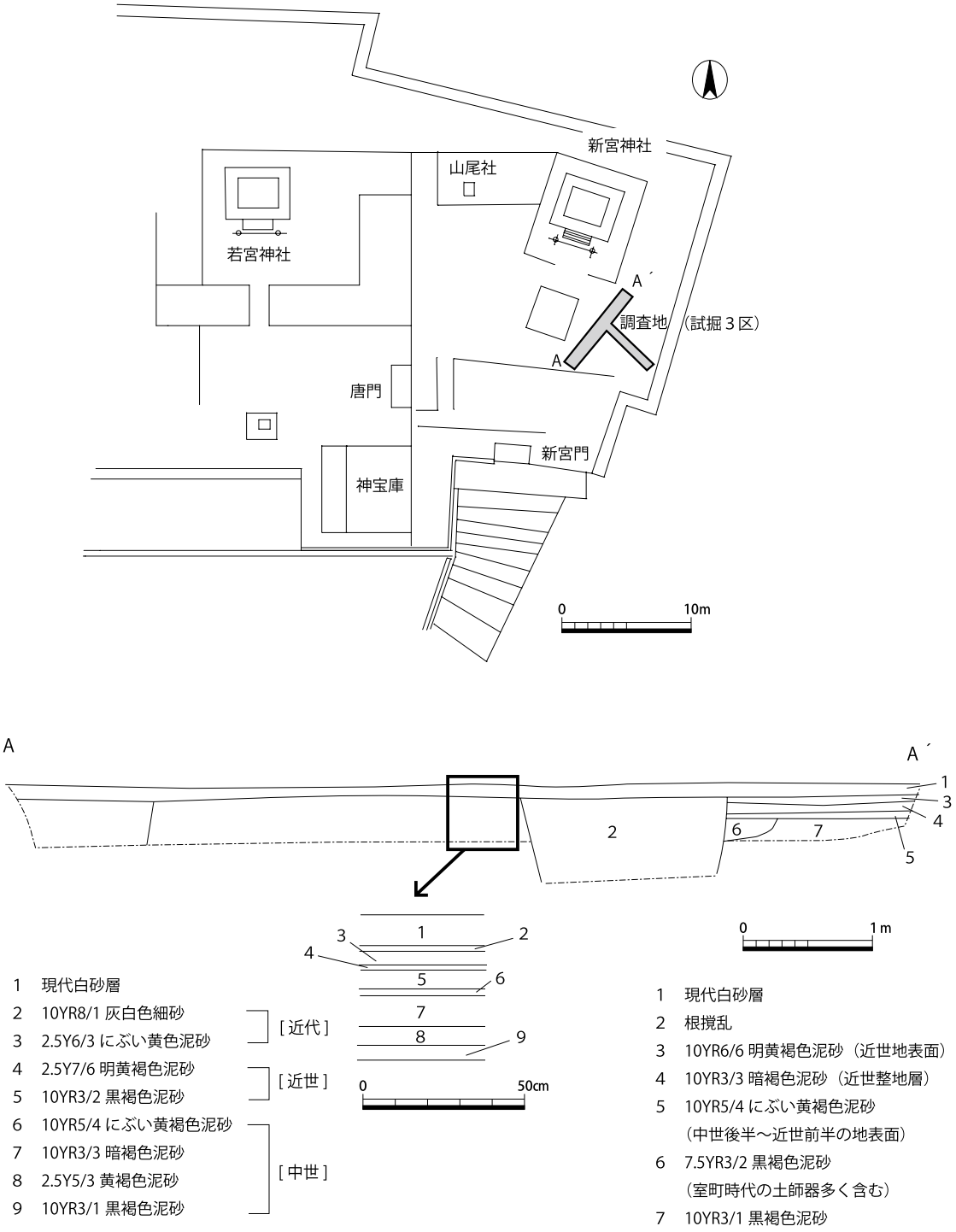
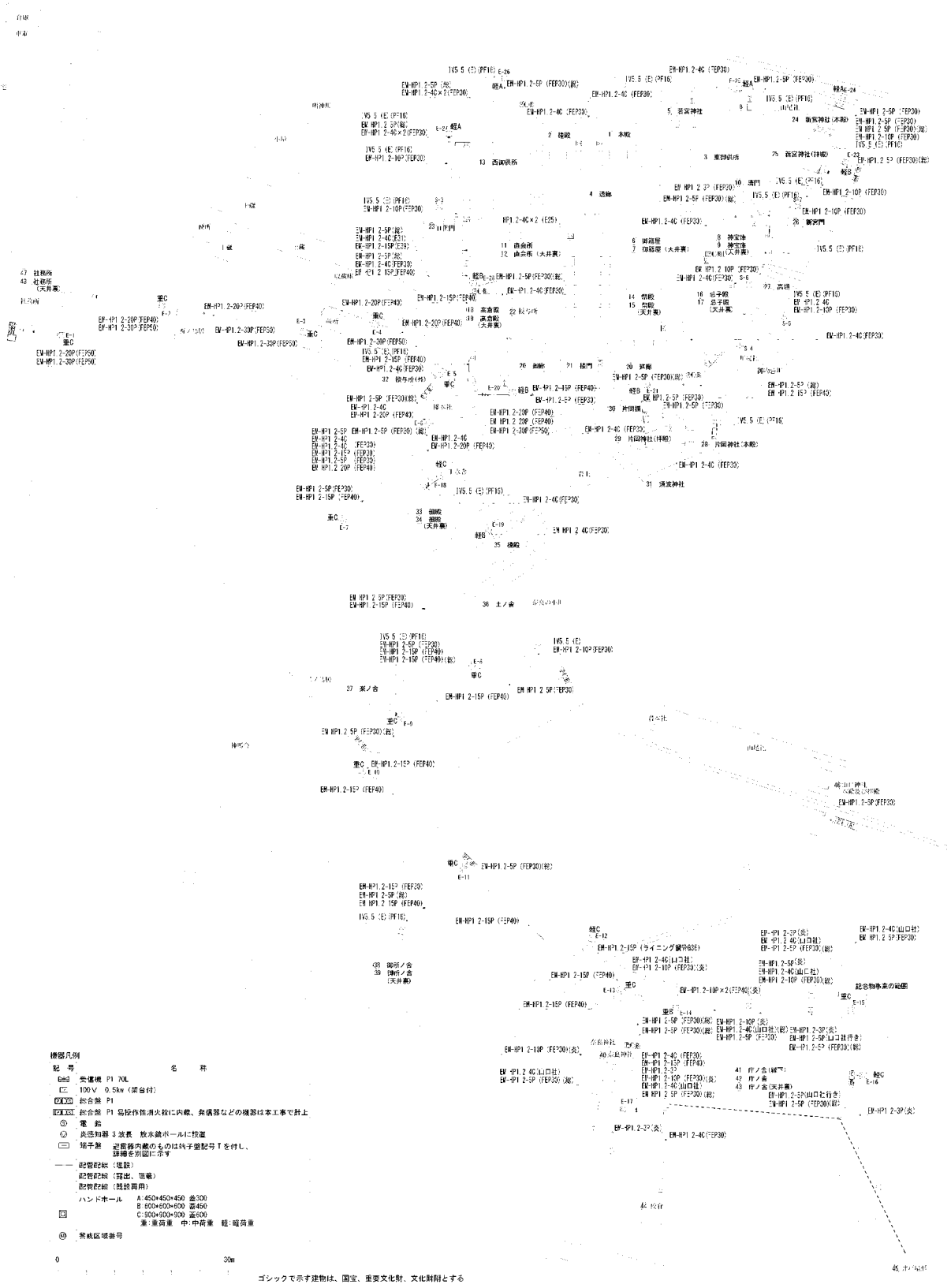
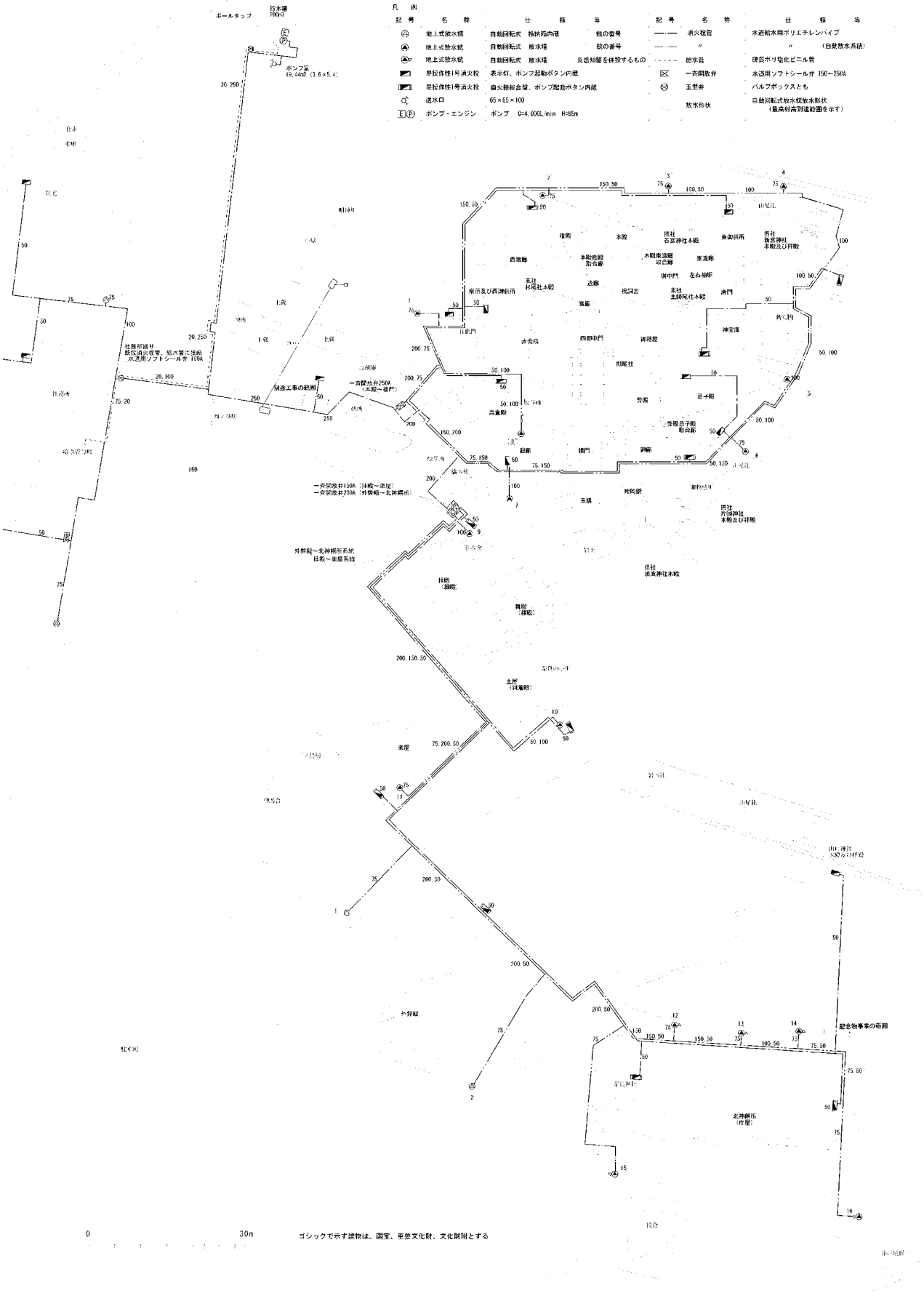


図13　試掘３区配置図（１：500）、断面図（１：50）



付図１　自動火災報知設備工事計画図



付図２　消火設備工事計画配管図

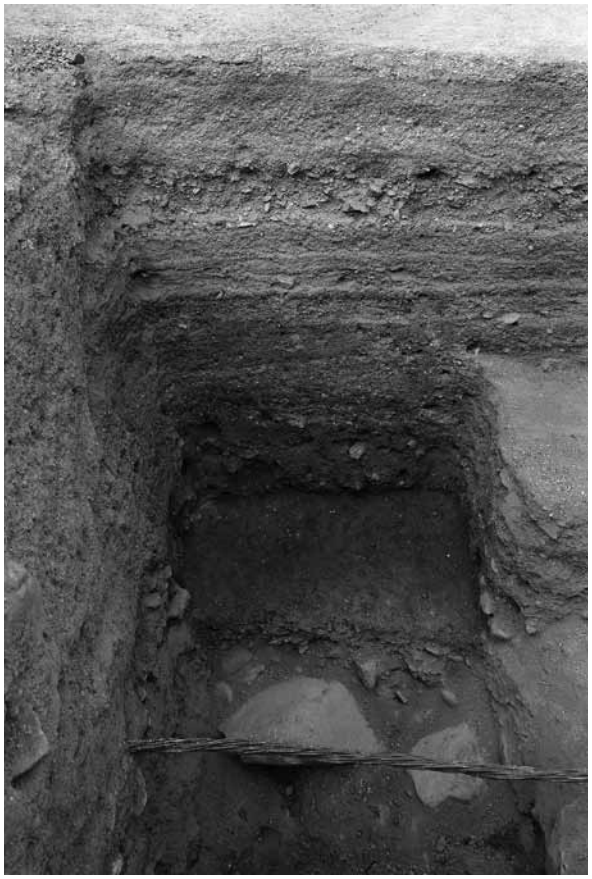
図　　版

1　調査区全景（南東から）

2　西トレンチ全景（南から）

図版２　遺構

1　橋殿と幾重にも堆積する整地層（南西から）



2　西トレンチ西端断割り断面（南西から）

3　二ノ鳥居から橋殿を見る（南西から）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	しせきかもわけいかづちじんじゃけいだい
書　　名	史跡賀茂別雷神社境内
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－１３
編 著 者 名	布川豊治
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡賀茂別雷神社境内（しせきかもわけいかづちじんじゃけいだい）	京都市北区上賀茂本山339（きょうとしきたくかみがもともやま）	26100	A112	35度03分35秒	135度45分10秒	2020年８月３日～2020年８月17日	21㎡	防火施設整備(建造物)事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡賀茂別雷神社境内	史跡	鎌倉時代～室町時代	整地層	土師器、瓦	鎌倉時代から現代まで、この一帯には各時代の整地層が堆積する。
		江戸時代	整地層	瓦	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-13

史跡賀茂別雷神社境内

発行日　2021年12月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961